すきすきわんこ
体験版

＊＊＊

西向きの窓から、ほの淡い十一月初旬の陽射しが差し込んでいた。
秋と呼ぶには少し肌寒い気候も、閉じられた窓と薄いカーテンを超した陽射しの中で和らげられ、穏やかなものとなっている。
閑静な住宅街に佇む築十五年の一軒家、その二階。北西に面した子供部屋の中に、途切れ途切れの荒い息が響く。
「っ……は…ぅ、っ」
ぎしぎしと軋み、跳ねるように揺れるのは、窓傍のセミダブルベッドのスプリング。
部屋の中は勉強机にカーペット、小さな本棚、クローゼットが並んでふたつ。机には教科書とノートと参考書。クローゼットの扉には制服が掛けられ、床には数冊の雑誌が積まれている。どこの家庭にもあるような、子供部屋の風景だ。
だが、その中で行なわれている事はいささか様子を異にしていた。
「ふぁああ……」
跳ねあがる肢体と共に、途切れ途切れの喘ぎが響く。舌足らずな幼声がつむぐ甘い響きは、それでも確かに快感を紡ぐ嬌声だ。

部屋にひとつしかないドアは固く施錠され、その中に篭った熱気と匂いを閉じ込めている。
ベッドの上に仰向けになった少女は、持ち上げた下腹部からじんわりと広がる甘い快感に身体を震わせ、切ない吐息を繰り返す。
スカートは腰上までめくれ上がり、幼い下着はくるりと丸まって足首に引っかかっているのみ。露わになった白い肌のなか、小さなおなかは少女の吐息に併せて上下し、しっとりと汗に濡れた細い腰がくねる。
「っ、……クロスっ、……キモチ、いいよぉ……っ」
堪えきれなくなった甘い疼きに、少女は、自分を押さえ付ける愛しい相手の名を呼んだ。
わぉんっ!!
ふさふさの尻尾を振り立て、すっかり冬毛に生え変わった真っ白な毛皮を震わせて。体高八〇センチの大型犬が、力強く吠えて少女に答えた。
ベッドの端からずり落ちそうになるほど大胆に押し広げられた脚の付け根、大きく上に突き上げられたお尻の下。まだほとんど産毛もないような少女の秘所を、クロスの鼻先が行き来し、熱い舌がぺちゃぺちゃと唾液の音を響かせる。
粘つく唾液にまみれた長い舌は、器用に少女の秘裂を押し広げ、薄いく色づいた合わ

せ目の奥まで入り込んでは、とろけ始めた花弁をなぞり、快感に尖り硬くなった秘核をつつき、舐め上げてゆく。
「んぁ、あぁっぁ、ぁっ……や、だめ、そこ、だめえ…っ」
汗ばむ頬を枕に押し付けて、愛犬の頭を押さえつけるように手を伸ばし、ユイは細い喉から嬌声を絞りだす。
その一方で、もう片方の手のひらはほとんど無意識のうちに胸へと延びていた。トレーナーの下、ずれたスポーツブラの隙間に少女の指先が伸び、ささやかな乳房をそっと押しこねる。
乙女の証としてはささやかな、薄い肉付きのユイの身体だが、既に胸の先端はつんと尖り、立派に官能の炎を燃え上がらせていた。
そんな少女をいつくしむように、獣は熱い吐息を蒸気のように噴き上げながら、丹念にユイの股間に舌を寄せる。まるで人の指のように巧みに蠢くピンクの犬舌は、ほぐれはじめた少女の花弁をかき分け、蜜の湧き出す孔奥をつつく。
「ふあ……や、っ、クロス……クロスぅ……っ」
ぬめる舌がもたらす感覚に、波打つ快感のうねりがユイを襲った。
恍惚の波間の中に溺れ、少女の指は無意識の中にシーツを掴む。細い喉が反り返って何度も愛しいパートナーの名を叫んだ。

クロスがユイの家にやってきたのは、一昨年の冬の事だった。
年の離れた姉への反発心から、いつも自分にも妹が欲しいとねだって両親を困らせていたユイが、遊びに出掛けた公園の片隅でみつけた、雨ざらしの段ボール。
その中で眠っていた白くて丸い小さな毛玉に、ユイはすっかり心を奪われてしまったのだった。
折しもその日はクリスマスイブの前日。立派な尻尾に小さく丸まった耳、真っ白でふかふかの毛皮は、まるで本当のサンタクロースが冬という季節を運んできてくれたかのようだった。
服が汚れるのにも構わずに段ボールを抱えて家に飛んで帰ったユイの、三時間にも渡る説得の末、彼は正式にユイの家に迎え入れられることになった。
ダンボールの中に敷かれた毛布に包まって、こんこんと眠っていた小さな小さな生命は、ユイや姉の愛情を一身に受けて育った。ユイの腕の中におさまってしまうほどに小さかった身体は、いまやユイをその背中に乗せられるほどにまで大きくなった。
そして今。小さかった頃とまるで同じ、無垢な黒い瞳をきらきらと輝かせて、クロスはユイの身体をベッドの上に組み敷いていた。
わふ、わぅ!!
ユイの秘所がたっぷりと濡れほとびれ、小さな花弁をほころばせてきたのを見計らっ

たのか、クロスはベッドに両足をかけて少女の背中に覆いかぶさってくる。
セミダブルのベッドを軋ませるほどの大きな身体に身体を押し潰され、ユイはむぎゅうっと幼声を上げる。
「わ……」
おなかの下、おへソの上に熱くぬめる感触を感じ、ユイは顔を赤くする。
クロスは腰を屈め、ユイの脚の付け根の大事なところにびくびくと反り返った硬いものを押しつけてきたのだ。
「く、クロス……っ!?」
舌とも、指とも違う、熱く硬い感触に、ユイは戸惑いの声を上げる。知識としてわかってはいても、粘膜に包まれた生々しい『雄』の感触に、ユイの頬は紅潮していた。
（こ、これ、クロスの……おちんちん……っ？）
クロスも前戯をしているうちに十分に興奮していたのだろう。体内の鞘から抜け出し、すっかり露わになった生殖器は、硬く太く膨らんで、ユイの脚の付け根に擦りつけられる。その先端からは熱い先走りが吹き出し、ユイの下腹部をさらに汚してゆく。
「ん、や、あ……っ」
息を荒げ、腰を振り立てるクロスと共に。びくびくと震える肉の塊に大事なところの入り口を擦りあげられ、ユイも甘い声を上げてしまっていた。

反射的に閉じ合わせようとした少女の内腿に挟まれ、クロスの生殖器はぬるりと滑る。たっぷりと溢れた蜜に唾液、そしてクロス自身の先走りによってぬめるユイの内腿に、クロスは夢中になって腰を振り始めていた。

「や、クロスっ……ぁ……」

内腿と股間の隙間に、糸を引くほど濡れぼそった蜜が絡み、薄い肉付きの下半身が前後する赤黒い生殖器をリズミカルに締め付ける。ぬちゅ、にちゅ、と淫蕩な音を響かせる脚から、ユイのおなかの上へ、シーツの上へ、クロスのこぼす先走りがぴゅうっと吹き上がる。

（や……クロスの、おちんちん、擦れ、てる……っ）

お互いにむき出しの、生身の生殖器がこすれ合う快感は、舌の比ではない。お互いの性のシンボルを触れ合わせる行為に、ユイの胸は言いしれぬ興奮に満たされてゆく。

ぬるん、と力強く跳ねあがったクロスの生殖器が、ユイの脚と股間の隙間へと滑り込んだ。

クロスの舌で十分に快感を高められ、ほころび始めたユイの花弁を、直接クロスの熱い滾りが擦りあげる。まだ誰も受け入れたことのない乙女の証がきゅうと疼き、快感を訴えるように下半身に震が走る。

「ぁふ……にゃぁ……っく」

（キモ、チ、いいようぅ……っ）
折り重なる快感がお互いの行為を加速させてゆく。びりびりと足の付け根に走る快感に腰を震わせながら、ユイは枕に顔を押し付けた。
立て続けに押し寄せる快感の波の中、ユイは熱い息をこぼしながら身体を捩る。するとクロスはぐっと少女の背中に深く覆い被さると、生暖かい舌でユイの顔を舐めまわしてきた。
さっきまで自分の大切なところを責めなぶっていた舌だ。自分の匂いが染みついてしまっているようで、ユイは真っ赤になって顔を反らした。
「っ……」
は、は、と耳元で響くクロスの荒い息。乙女の大切な場所に押し付けられる、びくびくとうねる力強い肉の塊。小さな胸のなかで鼓動はどんどんと高まり、ユイは溜まらず、大きく息を吐いていた。
（……んむ、っ……）
羞恥を堪え、ちゅぶちゅぶと顔に塗りたくられる獣臭い唾液をユイが小さな舌で舐めとると、ぞくぞくと甘い痺れが少女の背を震わせる。
ユイはますます近くになったクロスの距離を感じていた。
（クロス……っ……）

体勢が変わったことで、クロスの突き上げが一段と激しくなる。クロスの逞しい生殖器はよりいっそう深い角度でユイの内腿を突き上げ、弾みをつけて揺れる肉槍は下腹部にぺちぺちとぶつかる。前後運動のたびに、包皮に埋もれた淫核の最も敏感な部分を擦りあげられ、ユイはびく、と背中を仰け反らせた。

「ひゃうぁっ、あ、ぁあ……クロスっ、クロスっ……!!」

ぐちゅん、ぐちゅん、とクロスの逞しい剛直が突き上げられるたび、ユイの綻びた花弁が前後に擦られ、こね回される。少女の処女孔はひくりと震え、その孔口にぷくりと熱い蜜の塊を噴き上げていた。

シーツに爪を立てて込み上げる快感を飲み込み、ユイは何度も声を絞り出す。

脚の付け根を行き来する硬く熱い生殖器から発された熱が、じんわりと全身に染み込み、伝播していくかのよう。頭の奥までをじんと痺れさせるピンク色の刺激に、ユイは口のなかに溜まった唾液をこくりと飲み下す。

「お……ねえちゃん……っ」

いつか、ドアの隙間に覗き見ていた姉の部屋での光景がユイの脳裏をよぎる。

ちょうど今のユイと同じ格好で、クロスの熱い滾りを受け入れていた、姉の姿を。

（お姉ちゃん……こんなにキモチいいコトしてたんだ……っ）

快感にぼやける思考の中で、ユイは胸奥にこみ上げる、切なく甘酸っぱい感情を噛み

締める。

＊＊＊

――ユイが姉と愛犬の蜜月を覗き見たのは、ささいな偶然だった。
その日、クロスの散歩に出かけた姉に続いて、友達のところに遊びに行くために家を出たユイは、途中で忘れものに気付いて慌てて家へ引き返した。
玄関の鍵を開けて部屋に戻ろうとしたユイは、自分の部屋への階段を上るその途中で、誰もいないはずの姉の部屋のドアから聞こえる物音に気付く。
「……おねえちゃん？」
姉の部屋のドアは、閉め忘れたのか細く開いていた。
部屋奥から聞こえる、押し殺したような声と、ベッドを揺らす物音。
○○心に不穏なものを感じながら、ユイがそっとドアの隙間から覗くと――そこには愛犬と散歩に出かけているはずの姉が、ベッドの上でクロスと絡み合っていたのである。
「……ッ!?」
声も出ないほどの衝撃に、ユイはへたり込んでしまった。
まだほとんど『そのこと』の意味が分からなくとも、それがいけないことだというの

は、ユイも直感的に理解していた。
スカートはフローリングに脱ぎ散らかされ、下着は足首に引っかけたまま。ベッドに腰かけて大きく脚を広げた姉は、そこにクロスを招いていた。
べちゃべちゃと音を立てて泡立った唾液をまみれさせながら、薄いピンクの合わせ目の隙間へと、犬舌が滑り込んでゆく。ぷくりと膨らんだ粘膜が透明な糸を引き、重なり合った肉襞のヒクつかせる。
姉はクロスの顔を脚の付け根に押し付けるようにして両手で支え、腰を上下に跳ねさせては、何度も何度も甘い声を上げる。
部活では県大会の代表に選ばれ、勉強ではいつもクラスでトップ。親戚や近所の人からも『お姉ちゃんみたいにならなきゃ駄目よ』とお手本にされている言われる立派な姉が、見たこともないくらいにいやらしく蕩けさせて、恥ずかしい言葉を繰り返して、大事な大事な『おんなのこ』をクロスの舌に滅茶苦茶にされていた。
33心にも見てはいけないものだと理解しながらも、ユイはドアの奥の光景から目を離せなかった。
絡み合う二人――一人と一匹の肢体、擦れ合う粘膜、吼え声と喘ぎ声。
神秘的なまでに美しい二人の睦みあいは、ユイの胸の奥に深く深く刻み込まれた。
（ふぁ……っ）

ドアの隙間を覗き見たまま、ユイがもじもじと擦り合わせる脚の付け根、子供っぽい下着には、いつしか蜜が大きな滲みとなって溢れていた。

＊＊＊

あの日覗き見た姉とクロスの恥態を思い出し、ユイのおなかの奥がきゅんと切ない悲鳴を上げる。とく、とく、と高まる鼓動は、心と身体の両方をもどかしいキモチで満たしていく。

（あたし、おねえちゃんとおなじこと、してるんだ……っ）

びゅる、と吹き上がる、白く濁ったクロスの先走りが、ユイのおなかに飛び散る。

いまなら、姉とクロスが何をしていたのかもよくわかる。

ユイもえっちなことには興味津々な年頃だ。どうすれば赤ちゃんができるのかはきちんと学校で習ったし、インターネットで男の子についている『それ』の写真を修正なしで見たこともある。

形こそ違えども、クロスの股間にそそり立つ怒張はそれに勝るとも劣らないサイズに膨張していた。

（クロス……、すっごく、苦しそう……）

ユイは、反り返ってのたうつ肉竿の根元へそっと手を伸ばした。クロスの脚の付け根で揺れる大きな袋は、砂でも詰まっているかのように大きく膨らみ、ずしりと重い。
夜毎、姉の身体へと吐き出されていた白い子種は、もう三か月以上もお預け状態を続けられて、いまやはち切れんばかりだった。
滾り高ぶる雄の生殖器が、痛々しいまでに赤黒く張りつめているのを見、ユイは切なげに零れる息の間から、そっと問いかける。
「く、クロス……、えっち、したい、の…？」
それは、大切なクロスのことを思いやる、心からの言葉。
姉の代わりに、クロスを満足させてあげたいという、献身の愛だった。
一年以上に渡った姉とクロスの蜜月も、この夏――姉が都内の私立の学校に転校を決め、通学のため寮での生活をはじめるようになってからは途切れていた。
夏休みを前に、両親にも黙って進路変更と寮生活を決めた姉は、半ば家出のように親戚を頼って家を離れていった。これまで文句ひとつ言わなかった姉の突然の反抗に、両親は困惑し、憤りも露わにかなり強引な方法で姉を連れ戻そうともした。
だが、姉は頑として聞かず、最終的に両親が折れざるを得なかったという
あんなに素直だった子がどうして？　理由が全く思い当たらないことだけに、父と母は夜遅くまでそのことで話し合ったり、親戚に相談して回ったりしていた。

最終的に、姉も反抗期なのだろうという事に落ちついたのだが――それは違うと、ユイには分かる。
「……あたしなら……逃げたり、しないよ？」
きっと、姉は、クロスの事が嫌いになったんだ。
ユイはそう確信していた。
犬と人との交わりがいかに異常で、常軌を逸した行為であることかを十分に理解するには、ユイはまだ若い。けれど姉がいなくなる直前、いつものように懐こうとするクロスをあからさまに避けていたり、普段見た事もないくらい強い調子で叱りつけていたのを、ユイは見ていた。
だから、悪いのは、お姉ちゃんの方だ。
あんなにも大好きだったクロスを――ベッドの上で裸になって抱きしめ合い、何度も何度もそう叫んでいたクロスの事を、捨てちゃうなんて。
ユイには、どうしても許せなかった。
「おねえちゃんみたいに、ひどいこと、しないから……ね？」
両親もユイも、前触れもなく反抗を始めた娘の事で親戚や近所の人たちからも案じられることが多かったが――本当に哀れなのはクロスだった。毎日愛を誓い合っていた相手から、突然の拒絶を告げられたのである。一時のクロスの落ち込みようは見ていられ

ないほどだった。
　両親は姉の事で手一杯で、その間にクロスの事を案じていたのはユイだけだった。いなくなってしまった姉や、毎日遅くなる両親たちに変わって、散歩も、ご飯も、お風呂も、みんなユイが引き受けたのである。
　だからこそ、ユイは気付けたのかもしれない。
　クロスが、その欲望を存分に吐き出し、愛を確かめ合うことのできる大事な大事なパートナーを失って、ずっと苦しんでいる事を。
「クロス……っ」
　切ない気持ちを堪え切れずに、ユイはぎゅっとクロスの背中に手を回す。
　姉は毎夜のようにクロスを自分の部屋に招き、まだ熟しきっていない瑞々しい身体をクロスの獣欲に捧げていた。
　時に四つん這いになって膝を付き、時に愛しい相手を受け入れるように仰向けになって。姉はクロスの逞しい背中を抱き締め、その白い身体を受け止めていた。
　クロスのてらてらと光る太く赤黒い生殖器が、たっぷりと蜜を滴らせた姉の薄い桜色の花弁を掻き分けながら激しく出入りし、やがてその奥底に煮え滾るほどの白濁液をマグマのように噴出させる。
　力強くも猛々しい雄の表情でクロスが力強く腰を叩きつけるたびに、ピンク色を覗か

せる女の子の部分からは蜜が噴きこぼれ、シーツの上に散ってゆく。指なんかとは比べ物にならない太く長い肉の塊。限界まで硬く大きくなったそれが、じゅぷじゅぶといやらしい音を立てて、大切な場所からおなかの奥深くまで沈み込み、ぬめる肉孔を深々と掻き回す。

顔を真っ赤にしながら枕を噛む姉は、逞しいクロスの身体の下で腰をくねらせて大きな生殖器を根元までくわえこみ、押し殺した悲鳴をあげながら、何度も何度も絶頂に達していた。

そこには言葉や性別、そして種族すらも超越し、打算もなく純粋に想い合う二人の愛の姿があった。

だからこそ。――ユイは、姉の翻意が許せなかった。

見捨てられたクロスを、放っておけなかったのだ。

「クロス……、あたしが、おねえちゃんの代わりに――クロスのこと、キモチよくしてあげる、から」

ユイは痛々しいほどに腫れ上がった赤黒いペニスをそっと握り、下腹部へと押し付ける。滾る雄の肉竿の根元にはぱんぱんに膨れ上がった子袋がくっついて、クロスの腰の前後に合わせて揺れていた。

あそこに、ずっとずっと溜め込まれて続けている、クロスの滾りを受け止めてあげた

い。その一心で、ユイは心からの求愛を叫ぶ。
「あたしを、およめさんに、して……!!」
若いながらの一心の叫び。打算なく告げられる純真な魂の発露に、逞しい四肢を備えた獣が吼える。
わおぅんっ!!
答えの代わりとばかりに、深く覆いかぶさってきたクロスの生殖器がひときわ強くユイの秘所の入り口、もっとも敏感な部分に押し付けられる。
幼い身体ではそんな突然の快感に耐えられよう筈もない。押し湯押せる官能のうねりはたちまち小さな身体の許容量を上回り、ユイは声を跳ねさせた。
「ひぁあああ!? ……っく、ぁ、ふぁ、だめ、だめぇ……それダメ…っ、ヘンになっちゃうっ、だめぇぇっ……!!」
断続的な快感に少女の肉芽はすっかり縮こまり、包皮の中に埋まっていた。その上を前後するクロスの生殖器はぴちぴちと跳ねながら透明な先走りを吹き出している。姉との夜毎の営みで巧緻な愛撫を覚えたクロスは、すでに種族の壁など超えて、少女の身体を徹底的に責めなぶる術を心得ていた。
大きな身体がユイをシーツの上に押しつぶし、逃れることを許さないように大きく脚を押し広げ、敏感な粘膜部分に尖った生殖器をねじり付けてくる。

「ぁ、あっ、あ、あ♪、あ…っ♪」
いつしかオクターブを越えて高まるユイの喘ぎに応えるように、クロスは執拗なまでにぐいぐいと腰を押し付けてきた。
押し広げられた無毛のスリットの奥では、粘度の高い愛液にぬめる柔襞が小さくほころびて内側に溜まった蜜を覗かせている。まだ誰の侵入も許したことのない処女粘膜の内側では、すっかり準備の整った瑞々しい柔襞が、さらなる刺激を求めて小さく蠕動していた。
「クロスっ、クロス、クロスぅ……っ」
きゅんきゅんと、少女の胎内奥深くで純潔に護られた子宮が疼く。まだ男女の交わりの事も本当の意味で理解できていないユイだが、もっと深く、もっと強い繋がりを、少女は本能で求めていた。
激しく尻尾を振りたて、溢れんばかりの好意をぶつけてくるクロスに、いつしかユイも本当のいとおしさを覚え始めている。シーツを掴む手に力が篭る。耳元で響くクロスの熱く荒い息がぞくぞくと背筋を震わせる。
「ぁ、あ、あ、あっ、ぁっ、あっ、ぁーっ!!」
こりっ、と尖ったクロスの肉槍が、ユイの肉芽を突き上げる。
跳ねあがる嬌声のオクターブは、かき鳴らされる天使の竪琴のよう。

根元から先端まで、熱く焼けるように強張るペニスの凸凹が、ユイのスリットを押し広げるようになぞりあげる。最後のひと擦りに突き上げられて、ユイはびくっとベッドの上に手足を突っ張った。

（ふわぁ……っ）

声にならない甘い吐息がユイの唇から溢れ出す。

腰がじんわりと甘く痺れ、おなかがふわふわと宙に浮かぶようだ。下腹部のさらに奥深くから湧き上がった熱が、こぽり、と大きく少女の蜜口から溢れ落ちる。

かつて一度も経験したことのない、あまりにも高い快楽の頂き。ユイの拙い一人遊びではとても到達することのできない悦楽の境地だった。

（……っ、……すっごく、キモチよかったよぉ…っ）

脱力した少女の身体がベッドに沈み込むと同時、クロスはユイの下腹部から生殖器を離した。泡立った蜜が少女の秘所からにちゅりと透明な糸を引き、獣の象徴を淫らに濡らしている。いまだ満足に至らないそれは、ぴゅぴゅっと先走りの液を飛ばしながら、ぺちんと勢い良くクロスの腹の下で跳ね回る。

「ぁふ……」

心も体も溶かしてしまうような絶頂の余韻に浸りながら、ユイは力の入らない身体をもぞもぞと入れ替えた。

まだ、とくとくと疼く股間を晒すように膝を大きく上げ、ユイは細い手を伸ばし、クロスの身体を迎え入れる。体高八〇センチの逞しい肩をぎゅっと抱き締め、お日様の匂いをさせる毛皮に顔を埋めて深呼吸すると、ユイの背中にぞくぞくと甘い痺れが走った。

（クロスの匂いだ……っ）

安堵感をたっぷりと与えてくれる、枯草とお日様の匂い。大切な家族として二年を共に過ごした、自分をどこまでもキモチ良くさせてくれる相手の存在感が、若い少女の胸いっぱいに広がってゆく。

まるで海の上に浮かんで、並の間にたゆたうよう。

快感の余韻に身を委ね、幸せに浸るユイは、ゆっくりとクロスの鼻先に顔を近付け、目を閉じてキスをした。

すぐに応じて舌を伸ばしてくるクロスを受け入れ、唾液を飲み下す。

「んぅ…っ、んむ、れるっ……ちゅ」

ゆっくりと舌を絡め、粘度の高い唾液を啜る。ちくちくとくすぐったいクロスのヒゲが粘つく駅に濡れている。そこには先程まで、ユイの脚の付け根を濡らしていた蜜も混じっているはずだった。

自分の身体をたちまちキモチよくしてくれる、魔法のように器用な舌先が唇を出入りするたび、ユイはまた胸の奥にかあっと燃え上がる官能の炎を感じる。

まるで宣誓のように――婚礼の証のように。その姿は神々しくも、美しいものだった。
絡まり合っていた大きな犬舌と、少女の小さな桜色の舌が離れ、唾液の糸を残してゆく。シーツの上に背中を押し付け、ユイはほう、と深く息を吐いた。
「クロス……っ」
さくら色を覗かせてほころびた乙女の花片から、なおも間断的にとろとろと甘い蜜を吹き、ユイはまだ興奮覚めやらぬ様子のクロスの首に手を伸ばした。舌を出して息を荒げている愛しいパートナーに、甘く囁きかける。
「……ね、クロス、わかる？　……あたし、クロスにイかされちゃったんだよ……？」
再度、事後の余韻に浸る優しいキス――ユイはそのつもりでいたが、クロスはそうではなかったらしい。逞しい四肢をベッドの上に踏ん張らせ、クロスはユイの腕を振り解いて、ぐいと腰を持ち上げる。
「きゃうっ?!」
たちまちユイはクロスの下に組み伏せられてしまった。
まるで見せつけるように、クロスは猛々しくそそり立つ生殖器を少女の眼前に突き付ける。ほこほこと湯気を立てて、ユイの蜜にぬめる肉色の巨槍は、まだまるで満足していないとばかりに先走りの粘液の飛沫をユイの顔に飛ばした。
（く、クロスの、おちんちん……っ）

脈打つ血管を浮かび上がらせる太く硬い肉の槍は、行為の最中にちらりと見るのとはちがう迫力があった。真正面から目の前にはっきりと晒される、クロスの雄性、獣欲の塊。まるで、刃物を見ているかのような印象すら伴う。

細くやわらかな肉をかき分け、襞を切り裂くように身体奥深くに突き込まれるためのものであるのだと、若いユイにも直感的に理解させるものだった。いつもの元気いっぱいでやんちゃなクロスとはまるで結び付かない、恐ろしいまでもの迫力を伴ってグロテスクにびくびくとのたうつそれが、ユイの柔頬へと押しつけられる。

交合の相手を求め、その内側に呆れるほどの子種を蓄えた凶悪な生殖器――肌に触れるペニスの先端は熱く脈打ち、灼けるほどのすさまじい熱量が少女の胸を高鳴らせる。

早鐘のような心臓の鼓動に突き動かされるように、ユイは両の手を熱く尖る肉槍の先端へと伸ばす。

「クロス、イってないんだ……よね」

本屋さんでこっそりと立ち読みした少女雑誌の中にあった記事。男の子のからだのしくみを思い出しながら、細い指でびくびくと跳ねる生殖器を包む。

柔らかくも熱く蠢く巨大な肉の槍は、少女の手のひらには遥かに余る。粘膜におっかなびっくり触れながらも、次第に大胆に。小さな手のひらから大きくこぼれ出すクロスの生殖器を、ユイはやさしくしごき始めた。

ちゅ、くちゅ、ちゅぷ……

硬くはりつめた、火傷しそうに熱い生殖器をくねらせ、クロスが小さく吠える。腰にダイレクトに伝わる刺激が、クロスの獣の官能を呼び覚ましているかのようだ。落ちつきなく腰を左右に振りたて、しきりに生殖器を揺する。ユイは手の中から暴れて飛び出しそうになるクロスの肉槍をそっと握るので精一杯だった。

「……クロス…？　こ、これ、してると……キモチいいの……？」

さっきまでの強気から一転。様子の変わりだしたクロスに、驚きながら、おずおずとユイは指の動きを繰り返す。

手指を持たない獣同士の交わりでは、こうした手淫など未体験の感覚のはずだ。それを甘んじて受け入れているのは、やはり姉も同じようにクロスを悦ばせたことがあるからだろうか？　自分の手のひらでクロスが気持ち良くなっていることに感動を覚え、ユイはやわらかく白い手を使って、精一杯クロスに奉仕する。

ほどなく、クロスの生殖器先端から滲む粘液に変化が現れた。さっきまでは比較的さらさらして水のようだった先走りが、徐々に粘りを増し、色も白く濁り始めたのだ。

（うわぁ……こ、これ……クロスの……せーえき…かな？）

むっと立ち込める雄の匂いに、頭がくらくらとする。指の間をこぼれ落ちる粘液が、ユイのはだけた胸の間にぽたぽたと散った。まだブラの必要もない薄い胸、それでも尖

ったピンクの先端に、クロスの先走りが垂れ落ちる。
「クロス……もっと、してあげる…よ……♪」
とうとう我慢できなくなり、ユイは言う。
興奮に震える、可愛らしい小さな唇で、乙女は赤黒い生殖器の先端をくわえた。
クラスメイトが持ってきたえっちな雑誌で覚えた知識。その行為をなんと呼ぶのかは知らなかったが、グラビアの中の男の子は、やっぱりとても気持ちよさそうにお姉さんの口でおちんちんをしゃぶられていた。
それが、どんな意味を持つのかはわからない。けれど――クロスを悦ばせるには、これが一番良さそうだとユイも考えていたのだ。
「んぅっ!?」
小さな唇が触れた途端、ぴゅぅ、と吹き出した粘液がユイの口の中に広がる。圧倒的な存在感で喉奥から食道までをも占領するクロスの味とクロスの匂いに、ユイの股間が再び熱く疼き始めた。
食べることしか知らない少女の唇のなかへ、赤黒い異形の生殖器の先端部分が含まれてゆく。いつしかユイは、クロスの身体の下へ潜り込むように身体を動かし、ぶるぶると跳ねる獣の肉竿を舐め始めていた。
「クロス、……ちゅ……む……お姉ちゃんはしてくれなかったよね。……んむっ……れ

るっ……お、姉ちゃん、自分が……キモチ良くなるだけで、んっ、んんっ……し、クロスのこと、…ちゅ……こんな風に……してくれなかった…あむっ……よね？」

自ら仰向けになり、無防備な腹を晒して、犬の生殖器を口に含む――それは獣に屈服するのと同義の行為だ。人としての尊厳も無くす行為とそしられかねないだろう。記憶にある限り、ここまでのことは姉もしていなかった筈だった。

しかし、ユイに有るのは愛しい相手に尽くしたいという一心のみ。

あるいは、それもまた歪んだ姉への反発心――あるいは嫉妬なのかもしれない。

自分は姉とは違う。

あんなにたくさん、好きだと言ってくれていたクロスをあっさり見捨てて、どこかに行ってしまった姉とは違うのだと。ユイはただ、そう言いたかったのかもしれない。

なおも強く脈動するクロスの生殖器に、小さな舌を絡め、唇を押しつけて前後させ、指をさらに大きくスライドさせる。クロスの動きが次第に早まり、息が荒くなってゆく。ユイはいつしか全身を使い、クロスの快感を高める事に夢中になっていた。

口腔に拡がる生臭く苦い味を堪え、精一杯の動作で溢れ出す半透明の白濁を舐め取り、飲み下してゆく。唇を大きく広げ、熱い剛直の先端を口に含んで、奉仕を繰り返す。

「んむっ……ねぇ、……クロス、キモチいい？　……あたし、うまくできてる、かな？」

本当なら、もっと根元まで、全部を口の中、喉の奥まで含んで慰めてあげたい。

けれどユイの唇ではどうしてもそれは叶わなかった。太く長い生殖器は、とてもではないがユイの口の中には収まりきらない。だからユイは、一生懸命に舌を伸ばし、口をあけて、溶け落ちてしまいそうなアイスキャンディーを舐めるようにクロスの分身を啜りあげる。

時に伸びた指先は、肉竿の根元で重そうに揺れる子袋もそっと揉み上げ、そっと絞るようにこね回す。

生命の素をたっぷりと詰め込んだ生殖器をねぶる少女の精一杯の口腔奉仕に、クロスは激しく声を荒げた。

尻尾を激しく振りたてながら吠え、それでもぐいぐいと腰を押しつけてくる。何度も喉の入り口を熱い生殖器の先端で擦られ、そのたびに咳き込みそうになりながら、ユイは生殖器への愛撫を止めなかった。

「んぅ…っ!!」

うぉ、おぉおんっっ!!

クロスが腰を止め、大きく吠える。同時に、爆発するように、クロスの生殖器が先走りを噴き上げた。これまでの比ではない、まるで爆発のような射精。噴き上がるマグマの迸りが、ユイの喉奥へと直接、吹き付けられる。

それをも全て唇の中に受け止め、ユイは小さな喉を動かして飲み込んでゆく。青臭い、

クロスの匂いと味が、おなかの奥にまで感じられるようだった。より強くクロスを感じられることがうれしくて、

「ん……じゅるっ……んくっ……ぁふ……すごいよ……クロスの、熱くて、おっきくて……クロスの、味が、いっぱい……んっ」

じゅるっ、と先端に詰まった粘液を吸い上げて嚥下する。すると、ユイの胃や食道までもがクロスの迸りを浴びてかぁっ、と熱を持って疼くのだ。少しでもクロスを受け入れたい、そんな想いでユイの頭はいっぱいになり、同時に少女の下腹部は切なく甘い疼きを繰り返す。

とうとう最後の一滴まで、迸る白濁をほとんど残さずに飲み下し、ユイはおおきく息をついた。けほ、と喉の奥に絡みついた苦い後味に小さく咳き込みながら、口元を拭う。

「はあっ……」

クロスの獣欲の爆発がおさまるのを見届け、なおもたらたらと粘液をこぼすクロスの生殖器から口を離す。

そうして、ユイは正面からぎゅっとクロスを抱き締めた。

「クロス……」

そっと、愛しい相手の名を――もはやペットとその飼い主、という枠では括れない思いをこめて、ユイはクロスの名を囁く。

ぉん？　と首を振るクロスの耳にぐっと唇を押しつけ、ほほを当て、決意を込めるように先を続けた。
「……あたしなら、……いいよ？」
こつん、とクロスの頭に額を寄せて、荒い息をゆっくりと押さえながら、ユイは胸に溢れそうになる想いを口にする。
じっと、ただ真摯に。
精一杯の言葉で、クロスを抱き締めた。
「お姉ちゃんは、してくれなかったんだよね？　でも、あたしは……クロスにしてあげたい、から……」
ゆっくりと、確認するように一語一語を区切りながら、ユイはクロスに囁き、訊ねる。そうすることで、本当にクロスと意志を通じ合わせることができるというように。
ユイは、一人の少女として、この素敵な青年を愛していた。
心に満ちる甘く切ない思いを、かすかに震える唇に乗せて言葉にしてゆく。それは悪魔の誘惑のように、あるいは天使のもたらす福音のように、産まれてからずっと家族同然に過ごしてきた愛犬に囁かれていった。
「あたし……」
こくり、と緊張で再び渇いた喉に、粘つく唾を飲みこんで。

「――あたし、クロスの赤ちゃん、産んであげる」

ユイは、はっきりとそう告げた。

姉とクロスの、あまりにも倒錯的な行為を覗き見て、火照る身体を持て余すように拙い自慰に耽るようになった頃から、ずっと心に秘めてきた願いだった。

種族の壁を超え、遺伝子と、生命としての尊厳の境界すら破壊せんとする、甘くも切ない懇願。まだ、それが本当にどんな意味を持つのかも全て理解している訳ではないはずの少女は、なによりもはっきりと本能で、それを求めている。

おなかの奥で疼く卵巣の、子宮の、生殖器の求めるままに、クロスの子供を孕み、産みたいと――ユイは偽りなくそう思っている。

「クロスは、嫌？　あたしとの赤ちゃん、欲しく、ない……かな？」

なによりも。クロスを置き去りにして、勝手にどこかにいってしまった姉なんかよりも、私はずっとずっと、クロスを愛しているのだと。誰よりも誰よりも大好きなんだと、ユイは少しでも多くクロスに伝えたいのだ。

情欲に濡れ、半裸の身体を粘液と汗でとろとろに濡らし、蕩けるような笑顔ですがるような少女の問いに、クロスまっすぐな視線で答えを返す。

――おんっ。

低く響いたその吠え声は、了承、の合図だった。

【奥付】

「すきすきわんこ・体験版」

発行：平成 24 年 1 月 15 日
制作：良い子の諸君！

※作中の登場人物、組織、施設等は
　すべて架空のものです。